事例 3

障害の壁を乗り越えて広がる「じゆう劇場」の可能性

鳥の劇場

水戸雅彦
まつもと市民芸術館　芸術監督補佐

事業概要
「じゆう劇場」は、鳥の劇場のプロデュースのもと、2013 年に活動を開始したプロジェクトである。障害のある人、ない人が一緒に舞台をつくり、それぞれの豊かさを発見し、その素晴らしさを観客と分かち合うことを目指し活動している。鳥の演劇祭や鳥取県内外で上演しているほか、フランス・ナント市、タイ・バンコクでも上演した。また、少ない出演者による 30 分程の短編作品も制作。県内の様々な場所で出張公演を実施し、共生社会を先取りした風景を観客に提示することを目指している。

地域に根差し世界と繋がる劇場

鳥の劇場は、鳥取市鹿野町にある廃校になった小学校と幼稚園を改修して造られた劇場である。鳥取駅から電車で 20 分、さらにバスで 20 分ほど揺られ辿り着いた街並みには、京格子の町屋や、白壁に腰板といった古い屋敷が残っており、中山間地域の町並みらしからぬ気品を漂わせている。かつて因幡地方の軍事・交通上の拠点として、鹿野城が築かれ城下町として発展した風情が偲ばれる町である。

鳥の劇場、芸術監督の中島諒人は、大学在学中より演劇活動を開始、劇団を主宰したのち 1 年半静岡県舞台芸術センター（SPAC）に所属。その後 2006 年に現在の地に鳥の劇場をスタートさせた。地域で演劇活動を始めたのは、富山県利賀村で地域を拠点としながら世界的な視野で活動を続ける鈴木忠志を範としている。活動を始めるにあたって、中島は地域との連携、行政とのパートナーシップが重要なカギとなることを強く意識していた。「地方ではチケット収入だけで演劇活動は成り立ちません。ニーズがないところで演劇活動を成立させるためには、劇場が地域にどう役立つのか具体的な例を示し、いい意味で社会とギブ・アンド・テイクの関係をつくる必要があります」

鳥の劇場の活動は多岐にわたる。2019 年度の事業をみると、自らの公演活動として創るプログラム（大型連休公演、演劇祭公演、冬公演）を実施。その他にも「いっしょにやるプログラム」（戯曲講座、子ども対象の演劇学校）、「試みるプログラム」（高校生対象演劇学校、子ども対象の職業体験）、若手演劇人の成長サポート（若手劇団の滞在制作、試演、研修）、日中韓合同の BeSeTo 演劇祭と鳥の演劇祭の同時開催、県外や海外での上演、そして「じゆう劇場」。さらに、地域の学校、福祉施設へのアウトリーチ。地域住民向けのまち歩き、パーティ、カフェ、体験プログラムなど、幅広い住民層に向けて多彩なプログラムが年間を通してきめ細かく展開されている。これらの活動は県、市からも高く評価され、財政支援も含め良好な関係性を築き活動を円滑なものにしている。

世界が共感、「じゆう劇場」は地域を豊かに活性化する

「じゆう劇場」の発足は、2013 年に地域の障害者施設の職員から、入所者に演劇をやりたい人がいるのだけれど何かできないかと相談を持ちかけられたことがきっかけとなっている。折よく翌年 2014 年に「全国障がい者芸術・文化祭」が鳥取で開催され、多くの観客の前で〈三人姉妹〉を上演しいいスタートを切ることができた。その後毎年、鳥の演劇祭のほか県内何か所かで公演を行っている。

「演劇人として、人間の不思議さ内側の可能性をいかに外化するかを考えるわけですが、障害者と演劇を創ることで彼らの面白さ、可能性に出会えたことが継続の原動力になっています。〈ロミオとジュリエット〉では障害のある人の恋愛、〈マクベス〉では障害のある人の権力欲に着目しました。原作を軸にしながらも、彼らの経験から紡ぎだされる物語を挿入しています。コミカルな話、なんとも悲しい実話、それらが作品に普遍性を与えていると思います」

2017 年 10 月には「ジャパン×ナントプロジェクト（障害者の文化芸術国際交流事業）」に招かれ、〈ロミオとジュリエットから生まれたもの〉をフランス・ナント市のリュー・ユニックで上演した。リュー・ユニック館長のパトリック・ギゲールは、障害者の演劇上演に少しの危惧を抱いていたが、幕を開けてみれば観客は深く共感し、パトリックも高く評価し賛辞を惜しまなかった。中島にとって、ナント公演は、演劇が言語と障害の壁を乗り越え可能性を開いていくものであることを再確認する機会となった。

2019 年には短編作品〈いらっしゃいませ、ウォルマートへ〉と〈たぶん、朝食の後に〉を 7 回上演。うち 2 回は「ジャパン×タイプロジェクト」として、タイ・バンコクで公演を行い、2 度目の海外公演も成功裡に終了した。

中島は「じゆう劇場」に取り組むにあたって、参加者だけが満足する事業、家族や関係者しか来ない公演にしてはならないと考えていた。また、障害者だから（これくらい）、障害者なのに（よくやった）というような決めつけや先入観を排していくことにも腐心していた。その思いが「じゆう劇場」の可能性を広げ、参加者から観客までが深く共感する舞台作品となり、県内外の公演から海外公演にまで繋がっていったといえる。

「じゆう劇場」そして鳥の劇場の在り方は、地方劇場の一つのあるべき姿を体現している。一方スタッフ 19 人が、役者、制作、舞台技術、事務ほか多くの仕事を兼務し余裕のない体制も垣間見える。また、活動継続のために、人材育成、建物の改修、地域活動と海外活動の両立も課題だ。いずれ多くの地域劇場が鳥の劇場を範として事業を展開できれば、地域が文化によって豊かに活性化していくことに疑いの余地はないであろう。

鳥の劇場

住所：鳥取県鳥取市鹿野町鹿野 1812-1

概要：廃校になった小学校と幼稚園を劇場に変えて、2006 年から活動を開始。劇場は最大定員 200 席（椅子席最大 180 席）で、席数 80 席（仮設）のスタジオも備える。活動の中心は演劇創作で、国内・海外の優れた舞台作品の招聘、舞台芸術家との交流、他芸術ジャンルとの交流、教育普及活動にも取り組む。2013 年から「じゆう劇場」のプロデュースを開始。毎年参加者を公募し、継続的な参加者と新規の加入者が混じりながら創作を続けている。